

国文学時空論 — 国文学／源氏物語／加工文化／ミーム／スパロボ —

梅田 径

平成一八年五月四日

1 はじめに

ようこそ合宿へ！

移動疲れがまだちよつと残っていると思いますが、勉強会開始であります。はりきっていきまっしょい。

この勉強会は、国文学の理解と、その可能性の開拓を目的とします。勉強会の構成は「国文学」「源氏物語」「スパロボ」の三部構成となる予定です。

第一部では、国文学の発生と現在を、国文学者たちの動向を軸に、明治、大正、昭和の動乱の中でどのように変化してきたのかを概観し、第二部では源氏物語の現在の紹介を軸に、現代文化の中の古典文学を見ることになるでしょう。

第三部では、現代文化の中での源氏物語をどのように分析するかを考察します。

みなさんはきつと多かれ少なかれ、その定義がどうであれ「文学」についてならんらかの思い入れのあるかたがたであろうと思います。しかし、実際には「文学」に入る、あるいは入りうる作品は数万から数十万に上るでしょうし、到底一生に読みきれ的分量ではありません。

その中でも、「まず読もう」思う作品に、日本の古典文学とされるものが入ってくることは少ないでしょう。悲しいことにこれが現実です。

もしこの勉強会を通して、古典全集の一冊でも手に取ってみようかと思っただけならば、この勉強会は成功です。まあとてつもなく高い壁ではありませんが、それと、これはあくまでレジュメですので、文章表現に激しい乱れが見えますが、テンションの差だと思っただけでゆるしてくださいませ。

2 国文学

さて、まずは国文学の話題から。

いわゆる文壇ではなく、大学で、学問として成立する「文学」とはどのようなものなのか。

これは国文学の成果から考えてみるとわかりやすいかもしれません。一番わかりやすいのは『古典文学全集』編纂。

・『岩波古典文学大系』岩波書店 104巻

・『岩波新古典文学大系』岩波書店 104巻

・『新日本古典文学全集』小学館 44巻（刊行中）

・『新潮日本古典文学集成』新潮社 65巻（南総里見八犬伝を含ま

ない）

ほかにいくつかありますが。ほかこれらは、『古典文学』として認められたものの中で、とりわけ重要とされる(その規準はいろいろですが)ものを『大系』の一つとして出版するという事業である。

この仕事には二つの意味があります。一つは、ぶつ壊れた古典文学を修復し、出版にまでこぎつけさせるという『書誌学文献学』の成果としての役割。

もう一つは——荒っぽい言い方をしますが——これらの作品の「重要性」を把握し、「日本の文学」として統一したものに構築しなおす『文学史』的な仕事としての意味。

『文学史』にせよ『書誌学文献学』にせよ、その目的は対象となる作品における知識を増やしていくことにある。

簡単に見てみよう。

2・1 書誌学文献学

『書誌学文献学』とは、ようするに「書物」に関する情報を確定していくことと、「書物」の「原典」を回復することにある。回復? 「とはずがたり」の資料参照。

日本では芳賀矢一(1867-1927)がドイツから導入したもので、国文学においてもっとも基本的な作業で、「写本」メディアにおける誤字脱字衍字損壊虫損などを修正しようとする仕事である。

さらに言えば、日本ほど「文献学」の進んだ国は他にないだろう。池田龜鑑の『古典的批判的処置』における土佐日記の本文回復などが成果であるし、現在でもさかんに行われている。

基本的な方法としては、現存伝本の書誌年代を想定してから、校異をつくり校本をつくり文章形式を概観し構造を把握し、誤字脱字を正すという方法をとる。これは現存している写本を「系統図」に整理して、そのなかで「もつとも信頼できる本文」を確定し、その誤謬と思われる箇所を他の本によって修正す

ることである。とはずがたりは「孤本」なので、修正できないわけだ。

とはいえ、これらの方法は古典文学の「形式」に偏りがちで、内容面への関心が薄くなりがちである。

2・2 文学の知識

ついで、「書物」の情報の上に、「書物」の知識が作られる。「作家論」と「作品論」だ。

これらを基礎学として文献学の上に作り上げるようになり、これらの情報の研究が当分の間。藤岡作太郎(1870-1910)『国文学全史 平安朝篇』などを参照のこと。

いわずもがなだけど、こうした「作家論」「作品論」は作家/作品/読者のヒエラルヒーも西洋から輸入してしまうことになる。

神亡き世界に生きていた明治大正の国文学者たちはなんとか読者主体の文学史を記述しようとしたことは彼らのための名譽のために記述しておくけれど、残念ながら方法的な限界で成功を収めることはできなかった。

とまれ「作家論」と「作品論」を終えると、基礎学の最後の段階として「文学史」という仕事が行われる。

「文学史」の仕事とは、個別に成立している作品に何らかの共通点を探り出し、互いに関連付ける作業、とまとめてしまってもいいだろう。問題なのはここだ。共通点ってなんだよ。『紫式部日記』が『枕草紙』を意識して書かれんじやなかるうか、とか、『土佐日記』は「土佐」から「京」への移動の日記のようでそうじやないような。という個別の推定ならまだよいにせよ、いわゆる「ジャンルわけ」と結合して「文学史」が叙述されると、少しやっかいなことになる。¹

¹ 例に「土佐日記」の文学史的評価とかを出すかもしれないが、ださないかもしれないので記述しない。

問題なのは、「ジャンル」に入らない作品が「日本文学」として認められなくなる可能性があること、あるいは「共通点」を見出せない作品が「国文学」に値しないという評価をうけかねないことも問題だ。

そもそも、作品Aと作品Bが関係あるかどうかは「今読んでいる僕ら」と「今残っている作品」の問題であって、実際に関係があるかどうか資料的に証明できるものなんてほとんど無いのが現状だし、あるいは別の資料がでてくれば、今までの文学史は書き換えられるだろう。関連という意味でいえば、今現在なにも関係の無い作品が、未来においてでてきた作品に影響を与えるかもしれない。（もっといえば「完璧な文学史」には未来の諸作品までいれなきゃいけないことになる。これは無理だろう。）

また、「残らない」類の資料が共通点や関係性を証明しているかもしれないし、そこらへんの事情は複雑怪奇で専門家でも「よくわからない」ケースが多い。とりわけ、9、10世紀は。

結論を出すなら「文学史とは夢である」。そして、恐ろしいのは、この「夢」を見せているのは悪魔かもしれないということだ。つまり、ある種の「実証的な研究成果」として「文学史」を提出することはほぼ不可能なのだ。「文学史」とは解釈による評価の比重があまりにも大きすぎる仕事なのである。

怖いのは、この夢が「国家の連続性」の担保になりかねないということだ。端的にいえば「日本」という國の連続性を「文学」は担保しよう、と考えられてきたのだ。

とはいえ、最近では文学史をやる人がいないからどうしようもない。これはこれで問題だけど、後で説明しよう。

そういえばみなさん、奈良から江戸までの古筆とか、古書ってどれくらいあると思う？ 『国書総目録』を¹ご覧ください。

3 国文学のイデオロギー

ごく大雑把にまとめてみれば、これらの仕事が従来の「国文学の仕事」だったのだけれど、これが、明治、大正、昭和という時代の社会的な問題機制と結びついて国文学にイデオロギーというやつが発生することになる。

所謂「国文学なんてやってるやつは、そろいもそろって極右に決まってる」というような偏見（と、国文学者側の自虐的な自己分析）はそうして生まれてしまったわけ。

その原因はもう江戸の国学から離れて、国文学ができたときからあったんだけど、「文学史」の仕事から話すとう理解しやすいだろう。繰り返す。「文学史」は「作品と作品を結びつける」仕事である。

この仕事がポリテイカル・コレクトネスのパフォーマンスと結びつくと、「日本にはこんなすばらしい文学作品がうじゃうじゃのこってるんだ。日本すこい」という言説が政治家から一般庶民まで広まるわけで、これが昭和の総力戦体制と結びつくとすんごいことになるのは容易に想像がつくだろう。何より、総力戦における「思想戦」は、古典文学の評価から開始されたのだ。²

しかし、従来こうした「国文学の思想」を考えた本はなかったわけだ。ところが最近、一昨年博士号をとった人がこの研究をされていて話題になっている。この本を手がかりに、ちよつとあれこれ考えてみようじゃないか。

近代の「国文学研究」という学問システムは、この「普遍性」と「特殊性」の問題を構造的・制度的に抱え込んでいたと考えられる。（中略）近代日本では、「国文学」・「国民文学」の概念が西欧の圧倒的な影響のもとに形成されたために、西洋各国の文学を意識するかたちで「日本の文学は『世界文学』たりうるか」という議論がしばしば戦わされたからである。のちに詳しく述べるように芳賀矢一や三上参次らによる明治期の「日本文学史」は、「国文学」の概念を「世界文学」と

¹ 文獻カードが消えた、ブローデルもやってることだから許してほしい。
² 発行者注、西洋中心主義の意味での、「世界的」な「普遍性」と「特殊性」

対になるかたちで提示していたし、また、土井光知や岡崎義恵、久松潜一ら大正から昭和期にかけての研究者にとっても「国文学」を研究することは、「世界文学」ないし「世界文学」について語ることに密接な関係をもっていた。むろんのこと「世界文学」という概念は、「国文学」と同程度に抽象的な虚構概念にはかならない。しかし、「世界文学全集」の存在によって象徴されるように、近代社会の文化的空間のなかで、相応のリァリテイーをもって流通していた概念でもあった。近代の「国文学」および「国文学」のもつナショナルな枠組みを脱構築するためには、それを「世界文学」という概念との対概念として把握し、そのイデオロギー性を同時に検討し、かつ批判しなければならぬと思われる。⁴

このあたり、簡単に押さえておくと「源氏物語」の段で話がしやすいので押さえておこう。文学者や批評家やマルクス主義者や戸坂潤については触れないようにするが、自分の思う「文学者」たちとの意見の相違などを思ってくれば感動。

まずは明治、大正、昭和の学者の動向をチェックだ。

3・1 明治

まず、「国文学」が明治時代において、どうたちあがってきたのか、いくつかの先行研究があるが、それらをまとめてこうのべる。

まず一つには、東京大学文学部および帝国大学文科大学という、官学アカデミズムにおける「国文学」の教育および研究のシステムの制度的な成立過程を重視している点であろう。明治以降の「国文学研究」をささえた人材の多くは東京大学をはじめとした帝国大学の出身であり、そこから近代「国文学研究」の理念や成果が発信されていたから

⁴ 『国文学』の思想』笹沼俊雄著、学術出版社 2006、2。

である。(中略)一八八六年に東京大学文学部が帝国大学文科大学と改称されたのち、一八八九年に和文学科は国史学科と国文学科に分かれることになる。これによって制度上において明確なかたちで「国文学」という学問が独立した学科として発足することになったのである。⁵

制度上では、このように「官学アカデミズム」のなか「和文学科」からの分裂によって、国史と国文科の分裂によってできたものが国文学の世界であるといえるだろう。いわずもがな、この場合の「制度」とは国家の下の位階構造としてある。すなわち、「日本」を西洋に並ばせるための装置として国文学が成立してきたことをしめしている。⁶

その代表となったのが、海外留学の経験をもつ芳賀矢一だ。

芳賀によれば日本の近世の国学とは、自国の文化の源流としての古代の事情を裏証的にあきらかにしようとした点において、ドイツの民族文化の源としてのギリシア・ローマの古典を研究対象とするドイツ文学と類似するものなのだろう。⁶

この思想は「官学アカデミズム」の中で、日本の文学が世界文学たりうるといふ芳賀の確信に変わっていく。それが敷衍されれば、日本は世界たりうるといふ図式まで抽象化されるだろう。

一方で、日本人には日本人なりの「特性」があるというのも国文学者たちの確信だったらしい。

それが端的に表れたのが、芳賀の処女作で立花鏡十郎との共著である『国文学読本』(二八九〇)三上参次・高津嶽三郎『日本文学史』(同年)であった。この本について、笹沼論文はこうのべる。

双方の著作はともに、学問全般をあらわしていた前近代的な意味での

⁵ 笹沼、前掲書。

⁶ 笹沼、前掲書。

「文学」ではなく、literatureの訳としての「文学」という近世の儒学者や国学者の言説体系のなかに存在しなかつた近代西歐起源の概念を明確に対象として設定し、それに普遍性をあたえていた点に特徴があった。⁸

では文学とはどのようなものかといえは「普遍的な側面と国民的な側面が同時に共存するものとして、文学を定義していた」という。しかし、特定文学作品に「国民性」を見出すというのは「膨大な例外」を無視することで可能になる。これほど非科学的方法もなからう。

そして、西洋中心主義が日本を席巻する一方、「他者」としての近隣諸国は無視されるようになる。戯曲や詞曲といったすぐれた文芸、あるいは四書五經をはじめとする学問的な伝統は、日本にも強い影響を与えていたにもかかわらず、それらは「世界文学」としての文学」にはまらない、という偏見によって日本の「文学史」叙述から排除されていくのである。

一方で、「西洋中心主義」(てさつきからいすぎだけどさ)によって形成された大学において、国文学者と外国文学者はややこしい適着をおこなうことになる。

日本での「外国文学研究」は欧米の文学作品の翻訳や紹介、理論や思潮の輸入を主要な仕事として展開されることになるのである。

(中略)

一方で「国文学研究」の側からは、「外国文学研究者」は欧米の文学思潮を専門的に紹介し、新しい研究方法を安定的に供給してくれる埋ったいが便利な存在として機能することになる。「外国文学者」は、「国文学」にとつて「世界文学」への窓といえた。¹⁰

⁷ はい、広辞苑もってるひと
⁸ 世沼、前掲書
⁹ 世沼、前掲書
¹⁰ 世沼、前掲書

その結果。

「国文学研究」を専門とするものにとつて、外国語の習得はそれほど必須のものとはされなくなるのである。¹¹

ごめんなさい、語学できない俺です。

とはいえ、これによって「外国文学研究者」は「国文学研究者」にとつて国文学を活性化させる異人的な性質を認められるようになったといえる。

おかげで国文学の領域はいつそう固く身内意識をかため、ナショナリスティックな性格を強めることになるのだけれど。

3・2 大正

大正期もほぼ同じようなものだけれど、土居光知に注目。英文学者であるが、国文学においても海外からの思想の導入という点で、数多くの仕事をこなした。まずは、大正期の動向を二点、指摘しておきたい。

一つは世界文学全集の盛行である。当時、「世界」文学全集のみならず「世界」とつくさまさまな刊行物が発刊されたらしく、「世界」に対する興味が一気に阿成に膨れ上がった時期でもあった。

それを支えたのが、第一次世界大戦後の資本主義の興隆と、簡単にいえば出版業界の好景気だ。

第一次大戦の経験は、日本に自信をつけさせた。「国際連盟への加盟を機に『五大強国』の一つとして世界市場へ参入していく日本の国際的地位と世相が反映されているいえよう」ということですが、どうですかね。とまれ、『世界文学』がそのような時代背景をもとに、民衆へ拡大していったのがこの時期である。また、「文壇にも白権派のような、近代的な学校教育制度の中で自己形成をし、近世的な漢学の素養をさほど身につけずに育った世代の文学者たち

¹¹ 世沼、前掲書
¹² 世沼、前掲書

が、次第に文壇の中核をになうようになったことも押さえておきたい¹³。ところで、これは学園の問題でもあるが、とりあえずはおいておく。

ただ、この教育の問題は単に、大正期に漢文を知らない子が増えたという¹⁴ことではない。

一八八六年の中学校令は、中学校のカリキュラムを文部省の直轄事項とし、文部省の検定を受けた教科書しか使用できないと定めた。また、言語教育のカリキュラムは「国語乃至漢文」と名称を変えられ、この名称は戦前を通してほとんど変更されなかった。一八九〇年には教育勅語が發布され、儒教倫理に基づく「忠君愛国」という国民倫理を確立した。同じ一八九〇年に、芳賀矢一と立花純十郎の『国文学読本』をはじめ、近代最初の文学史および日本古典文学の選文集が出版され、ヨーロッパのジャンルのモデル（劇、小説、叙事詩、など）にもとづいた、新たな歴史的、国民的文学パラダイムが打ち立てられた。国家規模の教育政策と近代的な文学史・アンソロジーが組み合わされることで、その方向性において高度に儒教的でありながら、同時に西洋起源の新たな文学パラダイムの影響を受け、仮名に基礎をおく国語という新たな理念に導かれた中学校のカリキュラムが出来上がったのである。¹⁴

ポイントは「教育勅語」と「忠君愛国」だけではない。

教科書が固定されていくに従って「儒教的で」「仮名に基礎をおく」「国語」というパラダイムが教育の中に浸透してきたことをおさえておいてもよいだろう。これがそれまでの「文学研究」の成果というか、「国文学」のイデオロギーをそのまま踏まえていることのある程度間違いない。ただ「儒教的」という論理はまた多少別のきりくちを用意しなければならぬにしても。

¹³ 笹沼、前掲書

¹⁴ 『創造された古典』ハルオ・シラネら編、新曜社、1999、4、「カリキュラムの歴史的影響と統合するカノン」ハルオ・シラネ

とまれ、こうした状況が進行している大正期において土居光知の『文学序説』は広く読まれた一冊だった。

議論としては、文学には分類があり、またそれらが流行する時期があるというものだ。叙事詩、抒情詩、物語、劇が順番に展開し、それが周期的に繰り返されるというものである。それは全世界（世界Ⅱ西洋であることは土居は気づいていないか無視している）に共通の発展原理だというのである。こうした「文学史の普遍法則」を問う議論は、国文学にはそれまでなかったのだ。

もとはマシュー・アーノルドやモルトンのような、「英文学」ができたばかりの研究者の議論らしい。

ばかばかしいので細かい議論はしなくても、これは、文学の興亡にはある種の普遍的な規則があり、その規則にのっとって日本文学も展開したのだ、という「世界文学」の「普遍性」を肯定しながら（ア・プリオリに！）「日本文学」はその一翼に連なるのだという主張につながる。

『文学序説』のなかで土居光知が日本の文学史へ適用しようとしていた文学史の弁証法的な普遍法則の思想は、きわめて首尾一貫した全体的な論理的整合性を志向していた点において、近代日本における典型的な「外来思想」の条件をそなえたものといえる。それは、しばらくのちに日本の知識層を席巻したマルクス主義の歴史理論を彷彿とさせる。¹⁵

この議論の問題点は「例外が多い」ということと「作品や、当時の環境の独自性を無視しがちだ」といういうまでもないことである。なぜこのような議論が必要となったかについては論じないが、これもまた日本と世界の対概念のなかで、日本がいかに自己を表象するかという問題が透けてみえるだろう。

¹⁵ 笹沼、前掲書

このセクションでは問題が山積である。本なら二、三冊軽くかけるほどの問題があるだろうし、それらすべてを論じることではできない。昭和前期の岡崎義恵と、戦中期では久松潜一を紹介しようと思う。ほかに多くの注目を払うべき人々がいるのだが、キーボードをたたいている俺の体力がもたない。

3・3・1 岡崎義恵

岡崎義恵は「日本文芸学」というそれまでの文献学や書誌学のような内容面に関心の薄い研究方法を厭い、認識主体の美的鑑賞を文学作品の主軸に据えた鑑賞論を展開した国文学者だ。

佐藤春夫の文学論に影響を与えた学者としても知られている。その影響のさいたるものが「もののあはれ」をめぐる解釈だろうが、ここでは論じきれない。みなさん知らなくても予想はつくっており、「昭和戦前・戦中期において、一般の人々が日本の古典文学に関心をもつきっかけをつくっていたのは、アカデミズムの「国文学」ではなく、むしろ佐藤春夫のように多くの読者をもつ文壇作家や批評家だったと考えられる」¹⁶のはたぶん正解。ただし、その裏側では、国文学の成果をがっつり導入していたのも間違いない。文学史的な位置づけにおいては芳賀の議論を、美学的な観点においては岡崎の議論を、佐藤は導入していた。

岡崎義恵のやったことは『日本文芸学』を登刊したこと。これによって、芳賀らが行ってきた「日本文献学」を批判し、内容面の鑑賞という地平を開いた。特徴的だったのは、哲学の一ジャンルである美学の視点を導入し、「日本文芸学」の対象を限定したことだ。そして、鑑賞者が芸術作品を作り出すといった、ドイツ観念論の影響を受けてた享受者中心の芸術観をひらいたことである。

一九二八年（なんの年でしょう）『日本文芸の様式』これを世沼論文は手際

16 世沼、前掲書

よくまとめている。

芸術作品の形成は、まず製作者が、風景・静物・人物・歴史・心理・事件・社会的行動などの対象物を美的に鑑賞することによってはじめられるという。実用性や道徳性を度外視して外界を美的に把握する芸術家としての主体的な視点をもとにして、芸術作品は製作されるからである。そして、世界鑑賞を通じて作者が製作した作品は、享受者によって芸術作品としてふたたび鑑賞されなくてはならない。どれほど優れた芸術家によって書かれた文芸作品も、そのままでは他の実用的な言語資料と変わらない。読者によって「文芸」として扱われ、読まれることによって美的価値が生まれる。裏をかえせば芸術作品とは、享受者によって鑑賞されることを前提として製作されたものだといえる。¹⁷

こうした議論の根底にあるのは、「日本文献学」への対抗心と当時世間を沸騰させていた「プロレタリア文学」に対する憎悪である。アンチ・マルクス主義一人であった彼にとって、芸術作品を「政治的な主義主張」の宣伝に使うことは、芸術本来の特質を捻じ曲げ、不純なものに貶めることだと考えていたようだ。¹⁸

この議論の問題点は、ようするに「時代性」を無視するということである。たとえば、「あはれ」という語彙を日本の文化伝統全体の美的水準として設定してしまうとする。そうすると『土佐日記』も『玉の小櫛』もおなじ「もののあはれ」という言葉を使っているということだ。もっといえば、ある種の美的水準を設定することは、対象作品の説解を規定してしまうということも想定できるだろう。

また、彼は日本文芸の「様式」という点にもつよい注目を寄せる。近代西欧の文化は構築的だが、古典日本文化は非構築的である。というような議論だが、

17 世沼、前掲書

18 どうかへんだと思っけても、ここではまた黙ってほしいなおにちゃん。

これも膨大な「例外」を内包することによってしか成立しないうえ、「日本」の文化を先行して設定しなければ議論できない問題である。

芸術作品以前に「日本」が存在しているのだ。

これはなにかというと、彼のプロレタリア文学に対する態度などから、一見すると「政治」から距離をとっているようで、そうではなかったということである。

「そもそも、「日本文芸」の特徴はこれこれこうだ、というように規定し表象化してしまう行為自体が、個々のテキストの固有性と単独性を抹消することによってはじめて成り立つ、きわめて政治的な営みなのである。日本主義的な風潮が力を増していた一九二〇年代において、近世国学に依拠しながら「日本文芸」の特徴を西欧と対置することは、政治的なイデオロギー性を身に帯びざるをえない行為だった。¹⁹

なお、彼は東北帝国大学が拠点だった。いまでも東北大は国文学がとて強いことを付記しておく。

3・3・2 池田龜鑑、久松潜一

本当に概略だけ。戦時期の国文学者といえ、池田龜鑑と久松潜一だろう。両方とも東帝大派だ。なぜ東帝大かといえ、戦争にいかなくて済んだのが「官學」の連中だけだったからという単純で複雑な理由による。ちなみに、このとき東帝大の特待生で、戦争にいった同僚たちの愛人を寝取りまくったおかげで戦後学会から恨まれまくったのが大野晋である。

池田龜鑑は、一度大学から離れ、ジャーナリストや少女小説の作者（どんな本を書いていたのかの本にも載っていない）などをしてから大学にもどった変わり種で、「文献学」の第一人者である。彼の著作はともかく、研究成果は現在においてもよく参照される。

19 笹原、前掲書

久松潜一は『万葉集』をはじめとする、上代文学の学者である。彼の議論は「日本文芸学」の理論を一部ひきついでいる。それによると、国文学の研究とは「直感」からはじまり、その直感を正当化していく研究をおこなっていくことが国文学の基礎であるという。これらの議論を文学よりさらに広い文化的な分析にまで広げ、最終的には日本民族としての「日本学」へと広げるといっているのである。

この「日本」は、「西洋的な普遍性」をもちながら「日本独自の文化」をもっている民族の集合であり、それは「近隣アジア諸国にない」ものである。という政治的なイデオロギーがあったことはいまでもない。²⁰ この日本学というのは、近世の国学からもってきたものらしい。しかし、一方でこうした言説が、当時の「国文学研究」の思潮と方法を包括しようとして、国学からも外来思想からも影響を受けながら遠く離れたものであったことはいまでもない。

また、当時文壇的でジャーナリスティックな言説へのコンプレックスを、国文学サイドが抱えていたことは指摘しておくに値するだろう。

当時の文壇において、小林秀雄らの古典評論、川端康成、谷崎潤一郎らの日本的な作品が重んじられていたこともいうまでもないが、元作家の池田龜鑑が後年、自分が作品を書いていたことを秘匿し、家族や親類にも口止めをしていたのは、なぜか。²¹

3・4 文学研究の功罪

こうした問題意識に支えられていた国文学研究者は、総力戦下においては民族優位言説をばら撒く装置として花開いた。²²

また、国文学研究の枠からはみ出て「日本人論」の渦に「古典文学」が巻き

²⁰ 具体的には、真善美という言葉で日本文化を論じるのだが、これも西洋本質主義の一点だろう。

²¹ ウェイリーの『源氏物語』の英訳が逆輸入されたのも昭和のこのころ。与謝野晶子と谷崎とウェイリーと山田孝雄があれこれ探っていたのもこのころ。

²² 興味がある人は、1942、6『国文学解釈と鑑賞』をこらんでください。

込まれこともいうまでもない。その最たるものが『万葉集』を始めとする上代文学で、たとえば「海ゆかば水漬く屍 山ゆかば草むす屍 大君の辺にこそ死なめ 返り見はせじ」(万葉集・巻一八)の長歌だったり、『記紀歌謡』だったりしたわけである。が、これらはこの一首をもって『万葉集』全体の性質づけられるという悲劇的な作品解釈をうけることになる。

一方で、戦後にそうした解釈が反省されるようになって、「世界に冠たる日本人」の古典、民族の象徴としての古典という考え方がすぐに消えたわけではなかった。以下の池田龜鑑のことはからもそれはわかるだろう。

次に古典は、その規定において民族的感情から独立しえないであろう。元来古典は、人間の解放、人權の確立という点で、世界的、世界市民的の性格をもっているが、ギリシヤ古典のような絶対的な意味のものほかに、各国民または民族の過去において持った偉大な作家、作品に対する尊敬と愛情とが、それぞれの国民または民族をして国民古典乃至民族古典を形成せしめた。それは國民的感情や民族的自負の根源に接触するものである。どこの国でも、そのような古典をもつことは國民の誇りでなくあてはならない。亡國の民や遊牧の民は、そういう古典をもたない(後略)²³

ただ、日本人言説華やかなりし一方で、行われていた朝鮮や満州への「無関心」は着実に、現代にいたるまで蔓延していったのである。

この打破は、今、ポストコロニアル研究や文学理論の導入による「聖典」の相対化を通して行われている。²⁴ 一方で、さらなる絶対視をうける作品もあり、このあたりは混乱していますが俺のせいじゃないからゆるしてほしい。

現在の文学研究ではもちろん旧来の諸問題も残されたままだが、こうした過去の反省を踏まえて、もはや「日本」というものが先行的にあるとは考え

ない。その一方で、国民とか民衆とかの「日本的なもの」に訴えなければ残っていないほど「国文学」の状態は危険な位置にあることも事実である。

しかし、古典文学が、「国文学研究」によって読み解かれてしまうほど簡便なものではなかったのも確かだ。後半ではそちらを概括しよう。そして「文学のポテンシャル」をとくとくらんに入れよう。

……うう、おやつがたべたくなくなってきました。休憩いれさせてください。

4 源氏物語

さて、研究における歴史概論篇が終わりました。ではここでは、具体的に作品を見つつ現在の古典文学研究をのぞいていこう。取り上げるのは『源氏物語』。なぜなら、みんな「源氏物語以外よく知らない」だろうからだ。

だが、よく考えてほしい。君たちは『源氏物語』をよく知っているのか？ 自信を持って首を振るだろう。主に左右に。

では『源氏物語』とはいったい何なのか。どういふものなのか。何を知れば『源氏物語』の何を知ったことになるのだろうか。

これは誰にもわからない。しかし、わたしたちは『源氏物語』という作品があることを疑わない。受験でちらりと目にしただけであろうと、本屋でみかけただけだろうと。

『源氏物語』が古典の代表に祭り上げられる一方、日本人のアイデンティティを保障してくれるかのように、源氏言説も盛んに言われるようになっていく。それこそ「ものあはれ」から「悲劇の女の物語」という類型までさまざまに。

4・1 イコン化される源氏物語

はい、源氏物語原典で全部よんだことある人。みごとに誰もいませんね。

でも、読んでないにもかかわらず『源氏物語』についてのイメージは、みんな

²³ 池田龜鑑『古典学入門』岩波文庫、1991、原題『古典の読み方』1952

²⁴ その先にはどうやら闇しか持っていないようであるが、やらねばならぬのである。

なんらか持っていると思われるがどうだろう。

こうした源氏物語の「アイコン化」は『源氏物語』の流通を支えていくことになりました。

それこそ、800年前からずっと。

また一方で、そうした「アイコン化」は『源氏物語』を再生産の原動力とする力でもあったのです。

『源氏物語』がその成立の母胎となった貴族社会から解放されて以降、多くの人々にとって『源氏物語』は、精読の対象というより物語の象徴としての「アイコン化」されたイメージの束としてあった。そうした「アイコン化」されたイメージは、民衆文化のなかに深く根を下ろし、多くの物語が、直接的には『源氏物語』を意識することなく、そうした「アイコン化」された文学的イメージに基づいて再生産されていった。²⁵

こまかな例はこれから見ていきますが、『源氏物語』とは「アイコン化」されたイメージであること、その一方で、「原典」にあたったとき、そのアイコンを吹き飛ばす力をもっていること、そのうえで『源氏物語』がわけわからないということと話してきませう。

4・2 戦時下の源氏言説

「アイコン化」されて流通するケースは次に回すとして、まず、「原典」の力をみてもらいましょうか。

戦時下にまた戻ります。

戦時下に起きた言論弾圧といえば、小林喜多治獄死に代表されるプロレタリア文学の検閲が有名だろうか。

一方で体制側は、「古典文学」は「日本人の魂」²⁶であるからして、こちらは手

²⁵ 『源氏文化の時空』立石和弘・安藤徹編、森話社、2005、4、「物語・小説史の中の『源氏物語』」(土方祥一)

²⁶ もちろん必中も(一) p. 7

放して養めることになる。では古典文学「側」に「不敬」なものがある場合にはどうなるのか。

例をしめそう。

「源氏物語逆境の時代」ともいわれる昭和初期、昭和八年十一月二十二日、後援を予定していた『源氏物語』劇の上演中止命令が警視庁保安部から下された。理由は、「風俗擾乱」であるが「源氏物語自体は偉大な芸術である」ともいっている。

この劇は当時のいくつかの学会が後援し、新劇場が主催した大規模なものであったらしい。これは当時の新聞で大きくとりあげられ、朝日新聞にいたってはつきり「弾圧」という言葉さえ使った。

この事件に対して、『紫式部学会』がたちあがった。今で言うとフェミ団体のはしりのような、女学生女性教員で作られた文学学会だ。「むらさき」という紙面でのこの事件を糾弾したが、後に戦局の激化にともなう戦争協力的な論調に転じていった。

この事件は『源氏物語』の享受の断面というよりも、総力戦へと向かう当時の背景を表していただろう。しかし、こうした事件があっても『源氏物語』は禁書になつたわけではない。むしろ、昭和13年には教科書の『小学国語読本』(サクラ読本もいわれるような)に掲載され、教育界や論壇やらは鳴動した。不敬文書と載せるなんてけしからん。即刻削除するべきだってね。

この折、この教科書を探検したのは文部省図書第一編修課長・井上超の尻力による。掲載に反対したのは『国語解釈』主幹の橋純一である。

ややこしいのは、井上の『源氏』観はあくまでも「古典中の古典」とか「日本人の心性の自伝」といった毒抜きの理解か、あるいは体制翊賛的なものでしかなかった。『源氏物語』そのものにある「内在的な毒」を感じたのは、掲載反対派の橋のほうだったろう。その議論をみつつ、こう述べている。

1 皇子であるが源性を賜つて既に臣下に下された源氏の君が、父帝の皇后と密通する。2 皇后と源氏の君との間にできた御子が帝位に即く。

(これを古来冷泉院と申して居る) 3冷泉帝が御身の秘密を知り、実父なる源氏の君を太上天皇に準じた待遇をなさる。

これがどれほど「ヤバイ」言説かは、当時のスローガンというか、よく言われたことを知る人なら一日でわかるだろう。憲法とか、軍紀とか、教育の通達とかでみられているはず。

はい、そこでは天皇ってのはどういう存在だろうか。こんな言葉ができてませんか？

「万系一世」。当初はかなり空論的な意味合いが強かったものでも、戦争が連綿に繋がって法制的にも、実践的支配の理念としても展開していった。

昭和十五年、文部省編『国家の本義』や、昭和十六年の陸軍規定の『戦陣訓』で、しきりに「大日本国は皇国なり、万世一系の天皇にまし」としきりに読み上げている。

『源氏物語』はこうした言説をひっくり返す力がある。一連の藤壺密通文脈の中で、物語と現実が融合しかねない危険な箇所があると、上方洋一は主張する(これは現代の研究)。ちよつと長いが全文引用。もちろん全部は読み上げないだろう。

この要所は、物語の想像力と現実の歴史とが融解しかねない、危機的な境界面と限りなく接近している、と読める。藤壺女御が死去したあと、夜居僧都の密奏で出生の秘密を知った十四歳の天皇冷泉は、人知れぬ煩悶のなか、和漢の書物をひとり紐解く。

さまざまの書どもを御覧するに、唐土には願れても忍びても、乱りがはしきこといと多かりけり。日本には、さらに御覧じうるところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝え知るやうのあらむとする。

以上の三文よりなる物語本文は、まず第一文と、第二文で、「唐土／日本」と二項対立させながら、日本の場合密事による乱れが発見できな

い、とする。ここまでなら王位継承に関して「唐土／日本」が「密事あり／密事なし」という対比構成において、乱倫の不在という形で、日本の皇位継承史が聖別化されることになる。だがしかし、一転して、第三文の「たとひあらむにても(たとえ仮に……あるとしても)」の行文は、譲歩構文的な効果をもつ仮定条件付きの逆説(原文／「む」仮定条件、「も」逆接)の回路を通じて隠蔽された密事が皆無なわけがない、という含意をなけば定着しえていない。冷泉帝が読んだとされる書物は主に史書を推断して支障ない。したがって、天皇冷泉にあえて日本の史書を読ませ、王位継承の正統性にかかわる、そのような洞察を反芻させることによって、『源氏物語』は日本の史書の信憑性をいちじるしく損なっている。日本の史書がそのようなものなら、系図を内在的に含む史書によって保障された、万世一系の正統性は無傷なままでありえない。

したがって、この冷泉帝の御字問の箇所は、皇統譚の乱倫に關して、物語外部の史実領域にまで波及する汚染的・偶像破壊的な効果によって、万世一系の言説と鏡を削る言説たりうる。

というわけだ。この「毒」を含んだ書物を「古典中の古典」として祭り上げなければ成らない体制の矛盾というか、倒錯。現代から過去を見通すツールになりうる「古典中の古典」の研究はこれでも社会的に無意味なものだろうか(自己弁護を含む)

こうした問題は当時の「現代語訳」をめぐる様々な検閲によってもよくみえてくるだろう。偉大な古典と不敬文書の境目で今なお、「戦時」を捉えなおさせる。さまざまに『源氏』解釈をめぐる多くの学者・批評家が右往左往した。これが『源氏物語』のポテンシャルなのだと思う。

27引用にはここに注があるが略す。ただしここは、読解上も研究上も微妙なところだ、とはいえず、谷崎源氏でも削除された箇所である。ここに「毒」がないという解釈はむしろ厳しいものである。

4・3 源氏研究の現在

本格的には触れられておき、戦中期から同じ解釈を『源氏物語』にほとんどしてきたわけではない。年間七千本ともいわれる『源氏論文』の成果は半端ではなく大きい。なかでも『物語研究会』といわれる学会の動向は注目に値する。藤井貞和、神田龍身、河添房江、小嶋菜温子らを擁し、現代思想と文学理論などで古典文学に切り込んでいく一派である。独断と偏見で分析するとこんな

藤井貞和 「ナラトロジー」

三谷邦明 「言説分析」

神田龍身 「脱構築」

河添房江 「ジェンダー、フェミニズム、調度論」

5 源氏物語加工文化

では現在流通している『源氏物語』とはどのようなものなのだろう。「イコン化」されていることは先に述べている。

「イコン化」され改変された物語の形態を追う事はもはや『源氏物語』そのものの研究ではないのだけれど、こうした、「社会的、文化的、歴史的、政治的な文脈における」源氏物語の享受を考えることは大事なことだ。

また、そうした「二次創作」はどのように、なにによって改変されているのだろうか。これは現代の問題意識にかかわることだ。

ところで、こうした現代文化の享受においては、源氏物語研究では「享受」ではなく「時空」という言葉を使うようです。²⁸

この研究をしているのは立石和弘さんというフェリス女子短大の非常勤の先生らしい。この人の議論をかりながら大雑把にみていこう。

²⁸ただし、『源氏物語』における「時空」といえば物語世界内部に見える時代、空間意識をさす。参考『源氏物語時空論』河添房江

5・1 現代語訳

まず、現代語訳には三つある。いずれも「源氏物語」の名を冠され、読者に「源氏物語を読んだ」という了解を与えるべく作られていることは指摘できる。ダイジェスト本

主要なエピソードをまとめた抄訳本。与謝野晶子『新訳源氏物語』、円地文子『わたしの古典 円地文子の源氏物語』、尾崎佐永子『新訳源氏物語』

リライト本

源氏物語の、翻案小説。田辺聖子『新源氏物語』橋本治『薫変 源氏物語』全訳本

原文を現代語に訳したものと。与謝野晶子『新訳源氏物語』、谷崎潤一郎『潤一郎訳 源氏物語』、船橋聖一『源氏物語』、円地文子『源氏物語』、瀬戸内寂聴『源氏物語』

上述のものに加えて、「研究語訳」というものもでてきます。研究語訳とは、藤井貞和という学者が提案したもので、「現代日本語を破壊してでも、『源氏物語』そのものを忠実に現代語訳する。助動詞の機能性を訳し分け、原文の情報量を過不足なく内奥から伝えられてくる意図に沿って、厳密さを期する」らしい。²⁹

尚侍のかみ（「尚侍、玉鬘」のおん宮仕えの案件を、だれもだれもせきたてなさる（につけて）も、（どんなだろう、親と思ひ申す人（「源氏」のお心でさえうちとけまじい世間でありきたるから）

尚侍のかみの御宮仕へのことを、たれもたれもそゝのかし給も、いかならむ、親とおもひきこゆる人の御心だにうちとけまじき世なりければ

読みづらいね。現代語訳じゃないね。

こういう訳が必要なわけは、本文の情報にたいして「現代語訳」は「過不足」を生じさせやすいからだ。大きくは以下のような問題がある。

・敬語の処理

²⁹またいで引用。原典は『平安物語叙述論』東京大学出版会、2001

・調物や風景と心内関係の表出の処理。

・現代語訳者の解釈の処理

・原文にない文章を付け加えてしまう。

などの問題がある。原典に細かく当たらねばならないため、この事情に立ち入るのはさける。こうした問題が浮かぶのは現代語訳者側に、それぞれことなつた「源氏の解釈」が入り込んでくるからだ。

「現代語訳」が抱える問題はむしろ、他の媒体に加工される「源氏物語」のほうへの影響が大きい。

5・2 マンガ

「八十年代以降、源氏文化はコミック文化への傾斜を続けている」らしい。逆に言えば八十年代に、「源氏のコミック化」を促すなにかがあったはずだが、それは何かはわからない。そのままの勢いで2006年までまっしぐらに源氏文化は再生産を繰り返しているのだが、とまれ立石氏の議論を敷衍してみれば、少女漫画はこのように分類される。

最初のコミック

木村仁『新版源氏物語』(『女性コミック Elle』読みきり、1970)、鳥羽笙子『NHKマンガで読む古典―源氏物語』

ライトノベル系

大和和紀『ラブバック』(講談社コミックスフレンド、1974)、嶋木あこ『月下の君』(2002-2004)、六道慧『源氏十二宮絵巻』(角川ヒーローズ文庫、2002)、『バタリロ! 源氏物語』(白泉社、2004)

少女コミック系

森田岐子『源氏物語』(曙出版、1974)、大和和紀『あさきゆめみし』(講談社、1980)、佐々木みすず画、早坂暁原作『千年の恋 ひかる源氏物語』(角川書店、2001)

学習マンガ系

さかぐち直美画 樋口清之監修『学研まんが人物日本史』(学習研究社、1981)、千明初美画 永原慶一監修『集英社版・学習漫画 日本の伝記』(集英社、1988)

・桑田次郎『コミックグラフィック日本の古典 源氏物語』(晩教育図書、1982)、みはしまり『マンガ源氏物語』(平凡社、1988)

つばいこう『The Illustrated 源氏物語』(人物往来社)、『源氏物語 赤塚不二夫のまんが古典入門』(学習研究社、1983)、冨木奈緒画・構成、平田善信監修『くもんのまんが古典文学館 源氏物語』(くもん出版、1990)

岸田恋画、西村亨監修『マンガ源氏物語』(河出書房新社、1995)、まるやま佳画、長谷川孝士監修『わたしたちの古典4・5新装版 源氏物語』(学校図書、1998)石ノ森正太郎『マンガ日本の歴史』(中央公論社、1989-1994全)、『マンガ日本の古典』(中央公論社、全37冊)、『マンガ世界の文学』(世界文化社、全10巻 1995-1996)、小泉吉宏『大権源氏物語 まろ、ん?』(幻冬社、2002)

劇画系

臣新蔵『源氏物語』(浪漫コミック、芸文社、1991)

レディースコミック系

牧美也子『源氏物語』(小学館、1988-1991) ↓ 『週間 ヴィジュアル源氏物語』デアゴスティーニ・ジャパン(2002-2003)、『コミック源氏恋物語』(シテイへブン東海版11月号増刊)、『ワンツーマガジン社、2000)、寺館和子『妖変 源氏物語』(ぶんか社、2001-2002)、井手美香恵『源氏物語美しの花乱』(蒼馬社、2002年)、葉月つや子『源氏物語 藤壺の章』(『愛の体験』with デラックス) 竹書房、2004)

江川達也の戦略江川達也『源氏物語』(集英社、2001)

これら全てに指摘できることは『源氏物語』と題しながら、源氏物語を離れたところそれぞれ「お約束」に基づいた改変がなされがちだという点である。学習用につくられたものは「学習用」と銘打つことでむしろ改変された箇所が不透明になり、『源氏物語』からよりいっそう離れることになる。

また、これらのコミックスは原典ではなく、現代語訳された『源氏』からの

又引用によって構築されるケースも多い。それは主に、過剰な心内表現や、人物造詣に顕れる。

江川達也は「原文」プラス「現代語訳」プラス「会話」というトリッキーな構成でさらなる学習参考書としての地位をかためており、評価に値する一方でそのエロチックなコンテンツが「読み」を固定しかねない危険性もある。ここは現代人の『源氏』の「読み」に対してあまりにも無防備な側面が見受けられる。

5・3 映画

『源氏物語』の初めて映画は、昭和二十六年（一九五五）、戦後初の『源氏ブーム』のなかでつくられた。戦時下に弾圧の対象となっていた『源氏物語』が、映画として大衆メディアに載せられた意義は大きいし、前述した「藤壺事件」が描かれている『源氏映画』はあたらしい時代の息吹を感じさせるものであった。とはいえ、不敬に抵触する内容は、「自己検閲」で消えてなくなっているわけだが。

『源氏物語』の映画は六本つくられ、内アニメーションが一つ。それぞれ多様な『源氏』の解釈をうけて特色ある作品となっているが、すべてなんらかの「自主規制」が働いている。もともと端的な例が天皇だ。戦後映画として、映画の中で天皇が描かれるようになりながら、その「不敬」にあたる部分が削除されたり、その身体を映し出す事を避けたりする。これは外部からの圧力ではなく、作り手がわの「自主規制」として行われた。

また、映画の宣伝文句が戦中に逆戻りして「日本の古典中の古典」というような、言説に回収されていくこと注目し値する。『源氏』映画の何作品かは、海外での受賞をしている。が、ここに東洋の古典というテロップから透けて見える「オリエンタリズム」を感じた評論家も多かったようだ。王朝幻想の美的表象を「日本のもの」として把握し表象する『源氏』映画は大宅壮一から激しい非難をあびることもあった。

問題になるのは、『千年の恋』という2001年に公開された映画である。こ

こに見えるのがいわゆる「コミック文化」の影響と、加工文化からの再加工された『源氏物語』像である。立石氏はここに田辺訳「新源氏物語」の表現が数箇所見えることを指摘する。ちなみに無断使用だそうである。

（田辺）「いけませんわ、いけませんわ……」「泣いていらつしやる……光の君さま」「光の君さま、どうかのお美しいお嘆きも、お涙も、わたくしでなく、ほかの女人衆のためにお捧げくださいまし」「それは私を愛してられない、ということですか？　そうですかね？」「わたくしには申せません、申せません」

（千年の恋）藤壺「いけません。いけませんわ」「あ、泣いていらつしやる……」「どうか、その涙を、私ではなくほかの女人にお捧げくださいまし」などなど。

という具合だ。

このように原典にはない表現がつかいまわされて、大衆文化における『源氏物語』のイメージを定着させている。これは他の加工文化にも認められる現象である。この映画もまた、原典にはない加工作品の表現を再利用する、閉じた循環の内側にある。³⁰

5・4 カルチャーセンターから大学まで

では教育機関での『源氏物語』を見てみよう。あっさりよね。大学での講座はシラバスでも見てもらえばわかるだろう。人気のほども一回モグってみればわかる。高校教育の問題はみんなさんさんやってきただろうから取り上げない。問題はカルチャーセンターにある。

全国民間カルチャー事業協議会に所属する事業所数は一九九二年から二〇〇二年までの間に約百箇所増え、四十九社で計三百九十八箇所になるという。³¹な

30 立石ら編、前掲書
31 立石ら編、前掲書

かでも『万葉集』と『源氏物語』が強いらしい。で、こうした講座の紹介文を分析するとこうなる

①『源氏物語』を最大限評価し、読むことの現代的意義を強調する。

②原文で読むことの困難さに言及する。

③「ゆつくり」「じつくり」「たつぷり」「やさしく」「ていねい」に読み進め、その作品世界を「楽しみ」味わうことを勧める。

さらに、「気鋭の源氏研究者」「豪華な講師陣の共演」など、講師に対する言及もみられる。³²

これは、「スペシャリスト」が正統的な解釈をテキストほどこし、それを受け入れることで「本当の」源氏に触れられるという誘惑だとまとめられる。これは、『源氏物語』に対する大衆化（カルチャーセンターの受講生の増加）と卓越性（正統化、権威化）という二つの方向のなかで、享受者側の「本物志向」にたいして、教授者側が「本物を提示」しなければならぬ、というやっかいな問題なのである。

こうした動きは源氏研究者の悩みである。ここでは「多様な読み」は求められない。「妥当な解釈」も求められない。求められるのは「正統的な解釈」であり、それを知る享受者の「原典を読み、卓越性を手に入れた満足感」である。これができなければカルチャーセンターは潰れる。

自然、「本物ではない、加工文化」は「偽者」として排斥される。そうした動きを作っている装置として、「カルチャーセンター」や「カルチャーセンターの勧誘言説」が存在する。

6 『源氏』の改変原理はあるか

上述の言説に総合すると、「源氏文化」の問題点として「原典疎外」というのが見えてくる。立石氏の議論は「労作」³³に値する調査量と分析を誇っていると思われるが、そこには『源氏物語』の加工文化を『源氏物語』の低位に位置づけ、原典を読む力のある「我々国文学者」を高位に位置づけたいという欲望である。

それがわるいというのはもちろんない。しかし、「原典」という問題を出すのならば、その原典を指し示してもらわなくてはならない。さて問題。原典というのはどこにあるのですか？

そもそも「原典」というタームは、なにが「原」であるか？ という問題を提起してしまわざるをえない。「原典」とは、古代の作家にとっては自筆原稿かもしれないし、あるいは天皇に捧げた奏覧本かもしれない。近代の作家においては自筆原稿よりも活字となったもののほうが「原典」かもしれない。国文学者たちは何をもって「原典」というのだろうか。

さきほどみたとおり、「原典」とは「文献学的」に回復したものでしかありえない。つまり、今ある『源氏物語』とは『源氏物語』のキメラなのだ。

にもかかわらず、その成果は「原典疎外」ではないと主張する根拠は、それが古文だからだろうか。しかし、古本における『源氏物語』も大なり小なりの「源氏文化」による改変をうけてきたはずだ。「古代の源氏文化」の影響はどうなるのか。

『源氏物語』それ自体もまた「源氏文化」のパロディに過ぎない。「原典」に限りなく近いと「我々」が考える「源氏物語」を「我々」は読める」という自負がどこかに働いてはいないのだろうか。

また、「源氏文化」なくして『源氏物語』は現在まで残りうるだろうか？

問い直す。「源氏物語」の原典は「源氏文化」の上位に属するというのか。オリジナルを求めるのはよいにしても、オリジナルそれ自体を「決定」するのは

国文学者だといふのか。さらにその「解釈」は誰の手にあるのか？

『源氏物語』を「加工文化」と區別し、傾有しようとする動きは、これもまた国文学者のイデオロギーに過ぎないのではないだろうか。そして、それがただのイデオロギーではない、と断言できるほどの研究成果があるというのか。それを広く伝えられるような努力を怠っていないと断言しうるといふのか。

7 ミームという考え方。

そこで発想を変えてみよう。なぜ「源氏文化」は生き残るのか。その裏側に「日本人のふにやふにや」とか「世界に冠たるうにやうにや」というアイコンがあることはまあ認めよう。『源氏物語』自体の社会的に流通する価値は疑わなくともよい。

次の問題。現代社会で流通する『源氏文化』はなぜ『源氏物語』から「改変」されてしまうのだろうか。

それを解き明かすのは「ミーム」という考え方ではなからうか。

ミームとは、リチャード・ドーキンスが『利己的な遺伝子』³⁴で提案した概念で、今もつともハブられてる文化理論の一つである。ダーウインが提唱した「進化理論」を文化現象に当てはめる考え方だ。定義的な概念はただいま考察中の札がついていて決定的な定義はない。これからいくつか紹介するにしても、まだ未熟なものである。

ごく簡単に言えば、ミームとは文化における遺伝子である。この概念はむしろ人間よりも動物の行動を説明する。例えば芋を洗う猿。動物の行動は従来本能によって説明がされてきた。しかし「芋を洗う」本能は猿にはなかった（第何百世代かの猿になったら芋を洗うという本能が遺伝子に潜在してた？ まさかね）。だがひとたび「芋を洗う」ようになると、他の猿もイモ洗いをはじめ、次の代も芋を洗うのである。

34 リチャード・ドーキンス著、日高毅隆訳『利己的な遺伝子』紀ノ國屋書店、1992。

こうした、技能の獲得と波及を、「ミームの複製と波及」という立場にたつて考えると、人間の「文化」もまた、こうした「ミーム」の複合的重層的な塊としてとらえられるかもしれない。³⁵ その可能性を次に見てみよう。

7・1 ミームとは何か

ミームの定義は、アローン・リンチによる以下のものが公式だとされる。

ミーム：記憶のアイテムで、生物個体の神経系に保存されている情報の一部。観察者が抽象化することで同定される。観察者の裏付けは、以前にはかの生物個体の神経系に保存されていた同じ記憶アイテムを裏付けた先行経験に依存する。³⁶

ドーキンスがミームの具体例にあげたものは「メロデー、アイデア、キャッチフレーズ、服のファッション、型や建物の作り方」³⁷などで、これらを統括する論理として「ミームが自分自身をミーム・プールの中で繁殖させる方法は、脳から脳へと飛び移っていくことで、これは広い意味で模倣と呼ばれる仮定によっている」。これが正統的なミームの解釈である。³⁸

この議論を少し敷衍して言えば、

1. ミームとは最小の文化間の単位である。
2. ミームは自己複製子であり、これは神経系（てつとりばやく脳といつてしまおう）に保存される。
3. さらにミームはそれを脳から脳へと飛び移り、その表現系は「模倣」という意味に近い。

35 グニエル・C・デネット著、山口泰司訳『ダーウインの危険な思想』青土社、2001

36 ロバートアンジェラ編、佐倉敏訳『ダーウイン文化論』科学としてのミーム』産業図書、2004。

37 ドーキンス、前掲書。

38 ロバート・アンジェラ、前掲書。「序章」ロバート・アンジェラ。

いわゆる「模倣」とはミメシスの意であるようだ³⁹。さらに俺の言葉でまとめれば、「ミームとは(ミーム間で覇権を競いながら)人から人へ移動し承認される行為と知識の単位」だ。このアバウトな議論は、ようするに「単位」にかかわる問題になる。

はいもんだい。「人から人へ」移動していく「知識の単位」ってのはいったいなんですか? なるほど、人間みんなが「イモ洗い」をするのはいいんだけどこの「ミーム」なのか。「腕の使いかた」「水で洗う」「芋」「芋を水につける」「すりつける」。ミームはその単元を多元化されてしまう。それでは「単位」たりえない。そもそも「文化は情報単位の集合なのか?」「ていうか、文化って何?」これは現在のミーム学最大の問題だ。つまり、このミームという要素は「定義」からしてコケている。定義など不要だという学者もいる。「應用」にいたっての混乱はいわずもがな。しかし、進化論のタームを文化論に当てはめるといふのは面白い考えだとはおもわなにかね。

利点は、文化に「自然淘汰」という考えを導入できることだ。つまり「文化」には多かれ少なかれヘゲモニーがあり、そのヘゲモニー争いは進化的に残酷で、常により多く、より高く、より高度に、より便利に、支持者を獲得すべく戦う「ミーム」同士の争いなのだという考え方だ。

これが魅力的なのは、「われわれは、無条件にすぐれた文化を持っている」という不毛な文化のスカイフックを避けることができるということと、特定の文化的現象の、認識も照合も表現も評価も「ミーム」という単位の移動と複製によって説明できる「可能性がある」ということだ。

つまり、ミームを通して見えてくるのは可能性と動機なのだ。ミーム学の論集の序文で、デネットが述べている通り。

本書の目的は、ミームというミームの繁栄を確定することではなく、もし繁栄するのならそれは理由があつたことだと示すことにある

39 ドーキンス、前掲書

40 神様人間をすべての自然システムから隔離して特別扱いしてくれているという崇徳無しの道民思想現代版。ただだんに結論の先取りと思ふ停止といつてもいい。デネットの言葉だ

繁栄には理由がある。ならば衰亡にも理由はあるのだろうか。それは「ミーム間の覇権争い」によって説明がつくかもしれない。

動植物がみずからのニッチを選択し構築するように、文化ミームも「最適地」を探し、時には作りだす。この情景は人間の神経系で起こることで、それはミームが入り込もうとする人間の環境からの影響と環境への影響によって説明される。

ココロの供給量には限界があり、個々の心にはミームの容量の限界がある。それゆえミームの間には、できる限りの多くの心に入り込もうという熾烈な競争がある。この競争は、情報界の主要な淘汰力であり、生物界とちようど同じように、この調整が偉大なる創造性を発揮する。

この「熾烈な競争」を具体的に定位することは極めて難しい。われわれは何によって「よいミーム」を見分け、選択しているのだろうか。「環境による」という論者の苦い顔を想像するのは容易だし、そもそも自分たちの環境を説明するために「ミーム」というタームを導入しているんじゃないか? かつ

ただ、この議論がもつと「厳密さ」をもてば、デネットがいうとおり人間の定義さえ書き換えるほど強力な分析装置になるかもしれない。人間様という特別きわまりない選ばれた存在から、リパース・エンジンニアリング可能な、ちゃんと進化してきた自然の産物としての人間像ができるかもしれない。

ミームと遺伝子によって、文化と生物的身体としての「人間」が構築されたという立場は、もしかしたら人種差別や民族偏見といった不毛な優位主義を突き崩すことができるかもしれない。国連憲章やユネスコの宣言では、人間が遺伝子的にほぼ同じであることはわからない。異文化という概念をミームの導入はぶつつぶす。文化とはその「ミーム」の最適地なのだから。⁴³

41 生存に最適な地、溶岩の中に人間は住めないでしょう。

42 デネット、前掲書

43 一方で、人間が差別をするのは「人種に普遍的な」ミームだという立場もでてくるかもしれない。佐倉統著、『遺伝子VSミーム』廣済堂、2001

この「政治的」な立場からミームを考える人もいる。未熟だが可能性にあふれていると俺は考えたい。

何の話だっけ。

『源氏物語』でしたわ。つまり「加工文化」という現象を俺はミームの変奏として捉えなおしてみたい。これは一言で終わる。

『源氏物語』の「加工文化」とは、「源氏物語」ミームを現代の熾烈な競争のなかで調整され、創造された新しい文化ミームである。

突っ込むな。以上。こう考えると、国文学者は自分たちのニッチから『源氏物語』が離れたことが悔しくてたまらないので、旧来の「原典」にしがみつ়くことが熾烈な競争を生き残る戦略ということになるだろう。⁴⁴

しかしあれだ。俺はここでちよつと気にかかることができる。

この場合の「加工文化」とは『源氏物語』からのミーム拡散、いわば「散型」のミーム移動が行われているわけだ。

しかし、逆もあるだろう。「集」型のミーム移動による文化もあるはずだ。おまえら覚悟はいいですか、いよいよ奴がきますよ。

8 スパロボ

ここでスパロボです！

スパロボ学の伝統については、俺の書いた一連のリブレリ評や勉強会のレジュームを参照してほしい。まずはスパロボの定義から、公式サイトのものを引用する。

スーパーロボット大戦とは

数多のアニメロボットが一同に会し、地球と人類を脅かす敵と戦うシユ

ャンションRPG。

⁴⁴『源氏物語』をめぐるミームを図示できれば、不完全なものであっても非常に興味深いものになるのではないかと期待できる。

それが『スーパーロボット大戦』である。

昭和40年代、テレビの普及率上昇とともに番組の種類もドラマ・バラエティ・スポーツと徐々に増えていった。

そんなコンテンツの拡充が進む中、子供たちを夢中にさせたのが、ロボットアニメだ。

現実を遙かに超える超科学によって生み出され、人類の平和のために戦い続けるロボットたち。日本中の子供に感情の昂りを覚えさせてきた憧れの存在である。

それらの代表格が「マジンガーZ」「起動戦士ガンダム」などである。

（中略）アニメのロボットが作品の垣根を越え、手を取り合って共通の敵と戦う。ロボットアニメに触れたことのある者なら、誰しも一度は夢見る世界。

『スーパーロボット大戦』とは、それを実現させたゲームなのである。

『スーパーロボット大戦』の誕生は1991年。ゲームボーイ用ソフトとして市場に送り出されたのが、第一作目となる。

その後、ファミコン、スーパーファミコンなどあらゆる家庭用ゲーム機でシリーズを重ね、多くのユーザーを魅了し、その歴史を刻んできた。

「アドベンチャーパート」…登場人物たちの会話によって物語が進むパート

「インターミッシヨンパート」…ロボットの改造・強化を行うパート

「シユミレーションパート」…実際に先頭を行うパート

世界観や時代設定がまったく異なる、複数のロボットアニメ。これらをひとつの世界に挿入し、1本の物語を形成する。そのため、ともすれば矛盾が生じてしまう危険性が潜んでいる。それを調整し、長編下

ラマとして作品を成立させる。「アドベンチャーパート」では、この妙を味わうことができる。

複数作品の融合において「ロボット」の強さもバランスが求められる点である。誰しも、思い入れのあるロボットには強くいてほしいと願う。それを「インターミッション」で可能にしている。

そして、ロボットの醍醐味である必殺技。(中略)それをテレビさながらのアニメーションで忠実に再現。戦うロボットの美しさを「シジュミレーションパート」の戦闘シーンで堪能することができる。また、各キャラクターの能力を一時的に高める「精神コマンド」を搭載。これにより「力を込めて撃つ」驚異的な反応で避ける」といった、アニメーションを髣髴とさせる演出が付加されているのである。

(中略) ロボットによるアニメのクロスオーバー。

それが『スーパーロボット大戦』である。

ということ、これは「世界観や時代設定がまったく異なる、複数のロボットアニメ」がある種の「お約束」のもとに結集し、物語が進むという「集」型のミーム移動をしめしている。こうした「集」型のミームも「加工文化」であると俺は提唱したい。

「散」型も「集」型もそれなりの「戦略」にのっとって生き残りをかけ、現代文化の中に展開しているということはお分かりいただけるだろう。

問題になるのは、ここでもストーリーを統一するための公準が設定され、それに準じて各作品の「物語」が切り張りされている「原典疎外」が行われていることだ。「設定」についてはきりが無いのでここではあげない。

それは、スパロボの物語構造の中に顕れている。かなり抽象化した議論になるが容赦してほしい。

スパロボの基本構造として、「敵」と「味方」の完全分離と、思想戦を含む

総力戦というバックボーンがまず指摘できる。まず、「大量の敵の侵攻」によって「地球」が危機に晒され、「味方」は結集する必要に迫られる。一方で当初は物量も多く優勢であった「敵」はその内部に亀裂がはいり分裂していくことによつて脆弱化する。「味方」は様々な亀裂を乗り越えて「敵」と戦うことを誓い合い、よりいっそう結束を深めることによつて「敵」を下す。

このおり、「複数のロボットアニメ」に富野遺伝子が含まれていることがポイントになる。

それらの作品は「敵」として表象する「味方」の論理に敵対するだろう。しかし、そうした「物語」はスパロボの世界観では削除、あるいは馴致されることになる。

これはストーリー・プロットのみならず、「表現」にまでその影響が及ぶのだ。スパロボでは、もはや原典がどつかいっちゃった「新世紀エヴァンゲリオン」を参照。資料を読んでみてください。はい。みましたね。そこでスパロボのカットイン集をみんなにまわします。

8・1 原典疎外の問題

「原典疎外」がこの場合にも見受けられることはおわかりいただけだろう。しかし、問題なのはここから。この現象はたしかに『原典』側からはネガティブな事態ではあるけれど、「加工文化」側から見ればポジティブな事態ともとれるかと思われる。

そこで「スパロボ」の「オリジナル・ジェネレーション」に焦点を当ててみたい。これについての分析はすでに先の「スパロボ勉強会」⁴⁷にて済ませている。「オリジナル」とは「スパロボ」内部の世界観統一のために作られた「外部作品」をもたない「スパロボ的」諸要素のことだ。キャラクターとか機体とか設定

46 こめん、今作った。ようするに「敵」と戦うことを内面化できない子供たちが、自己破壊願望や他者依存の願望に飲まれて自壊していくストーリーを含む作品。「Zガンダム」あたりから始まると考えられているらしい。

47 いまさらこれが「講演会対策勉強会」だったとかいっても誰も信じないだろうなあ。

とか。

これがいまや、「60年代の夢」だったはずの「スパロボ」の大きな目玉になっており、またそのオリジナル機を集結させた作品が「オリジェネ」としてシリーズ化されるほどの人気になっているのだ。

Game

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION [OG] (2002年、GBA)

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION2 [OG2] (2005年、GBA)

OVA

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION THE ANIMATION1 [OGOVA] (2005年、OVA)

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION THE ANIMATION2 (2005年、OVA)

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION THE ANIMATION3 (2005年12月23日発売予定、OVA)

インテ CD

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION THE SOUND CINEMA Vol.1 (2005年、CD)

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION THE SOUND CINEMA Vol.2 (2005年、CD)

スーパーロボット大戦 ORIGINAL GENERATION THE SOUND CINEMA Vol.3 (2006年1月、CD)[※]

※スパロボ・ウィキより引用。ただし削除依頼が出されているのではないかもしれない。

という具合に。こうした「生産力」は「原典」にしがみついている限りでないものであるし、こうした「生産力」によって『原典』の現代的な位置と価値を改めて認識するという行為は、むしろ「加工文化」によって可能になる。思えば、『源氏物語』それ自体も複数の先行テキストから影響を受けているし、江戸期においても広く引用され「加工」されたメディアであった。本居宣長にいたっては勝手に一帖書き加えていたはずだ。

また、『なんて素敵にジャパネスク』を引き合いにだすまでもなく、『源氏』的想像力が新しい平安文化の肖像を作り出したこと、それによって『源氏物語』に代表される王朝幻想が現代においてニッチを構築しえていることを忘れてはならない。

そうした事態と、『源氏物語』のスペシャリストがどうやって共存していくかは別の問題であって、互いに排斥しあう関係にはないはずだ。「国文学者」たちが『源氏物語』のスペシャリストたることを自負し、その担保を「日本」に求めるようになれば、戦時下の繰り返し過ぎないだろう。

国文学のミームを他者へ波及させる戦略、あるいは原典の『源氏』を読んでもらう戦略に、むしろ「加工文化」とは有益な協力関係を結んでもらえるのではないだろうか。

実際、「スパロボ」ではスパロボに引用された作品が「リメイク」されたり、復権したり、キャラクターグッズが売れたりする波及関係が成立しているのだから。

9 終二

もはや何の話かわからないけど、今回は「国文学」という領域が抱える問題を『源氏物語』という大著から見えていったつもりだ。

日本に寄りかかるとの完全なやめたら「国文学」というミームは減んでしまふかもしれないという危惧は、若輩者の俺にだってある。

しかし、『古典文学』がでは現代文化の中でどういう位置を占めるのかはいろんな人がいろいろ言っているのだから、どの位置を占めるのかを考えた人はほとんどいないのが現状だ。

ミームというやや不確定で未知数のタームをつかってこの問題に切り込んでみた。そこに「加工文化」というタームを持ち込めたことは『源氏物語』を理解し考えるうえで便利だったけれど、この「加工文化」さえない領域の問題についてはいつそう複雑で難しいことになるのは理解してもらえたらうれしい。

スパロボについてはなにもない。

暇があれば『源氏物語』自体の勉強会をしてみたい気もする。が、これは非常に難しいのも事実だ。とはいえ、最先端の成果を使って読解する「源氏物語」像は高校教育で使われる教材としてのポテンシャルをはるかにしのぐものがある。暇だったら、ぜひめくってほしい。

できれば、原典で、そのお手伝いをしてくれる注釈書ぐらいなら紹介できます。

参考文献

俺がざっとでも目を通したものだけ紹介する。

古典作品を読むための主要注釈書。

『岩波古典文学大系』岩波書店 104巻赤。

もともと基本的なテキスト群。旧字体での記述など最高度の信頼度を誇る。古本屋で300円から。注釈の言い回しが古すぎて本文と注釈と、どっちが古文なのかわからないものもしばしば。

『岩波新古典文学大系』岩波書店 104巻緑。最新の研究成果。もともと信頼できる本文と注釈を持つといわれるが、やや改訂がはげしく誤植もある。和歌、江戸期の作品が充実。

『新日本古典文学全集』小学館 44巻白。現代語訳が一緒についていて便

利。ただし重たい。ハンデイ版もあるが、これは脚注方式。

『新潮日本古典文学集成』新潮社 65巻（南総里見八犬伝を含まない）黒。持ち運びがしやすく傍注で現代語訳がついているため読みやすい。ただし本文の評価は低い。

書誌文学学について。

基礎文献は数多くある。

池田龜鑑、『古典学入門』岩波文庫、1991名著。国文学が世界文学のなかで立ち上がってきたということは実感できるだろうし、悪い本ではない。

橋本不美男、『原典をめざして 古典文学のための書誌』笠間書院、1995第一級の書誌学書。更級日記の錯簡を正していく理論的展開は推理小説を読んでいるかのようにすばらしい。ちよつと古いがおすすめ。

国文学の歴史について。

取り上げた国文学者については著作集がでている。そちらを参照されたし。また、保田与十郎や、風巻景次郎、西郷信綱ら、とりあげなかった学者の論もユニーク。

笹沼俊暁著、『国文学』の思想』学術出版会 2006、2

今回多用した本。ただ、世界文学との関係については「現在進行中」であることを忘れてはならないだろう。

ハルオ・シラネら編、『創造された古典』、新曜社、1999、4

シンポジウムをまとめた論集。柄谷なども書いているが、秀逸なのは品田悦一の『万葉集』論。全体的に愚痴っぽい。

前田雅之著、『記憶の帝国（終わった時代）の古典論』右文書院、2004

ここでは取り上げなかったが、「古典」の倫理という切り口から現代の研究状況をきいている。妥当解釈に重点を置く立場にいるが、古典マジ終わったよーとかいってオルタナティブは用意できていない。論文集としては面白いけど、一般のひとにはよくわからないだろう。

源氏物語について。

山ほど著作がある。雑誌論文を含めると十万は軽く近く。今回とりあげなかった非常に多くの前提条件もあるのだが、

河添房江ら編、『叢書想像する平安文学』、勉誠出版、1999-2001

「物語研究会」のメンバーが作っている論集。古典文学全般に対する論考が多数。やや古いものもあるが、彼らの方法論を知る上ではもってこい。

秋山虔、『源氏物語の世界、その方法と達成』東京大学出版、1964

伸が書かれた本。すべての源氏研究はここから始まったとすらいわれる名著。議論は古めかしいが、いまだにパンチ力がある。『源氏物語』を女性の自立的な視点から捉えた画期の書。いかえれば少女マンガに転用可能な作品として源氏を読んだ最初の人かもしれない。

秋山虔監修『批評集成 源氏物語』全五巻、ゆまに書房、1999。

戦時下での資料などがぎっしり。基礎資料集。こうした資料を集められるのも『源氏』だから。

ウェブサイト、「源氏物語加工文化データベース」

ウェブサイト「源氏物語電子資料館」

立石和弘・安藤徹編『源氏文化の時空』森話社、2005

今回もつともお世話になったほん。源氏物語では享受のことを「時空」っていうんだよ。文献案内も重宝する。

林田孝和、原岡文子編『源氏物語事典』大和書房、2002年

最新の研究成果をあつめた事典。とはいえ、いわゆる「辞典」ではなくて研究事典である。「加工文化」についても説明がある。

ミームを学ぶ。

アメリカにミーム学のサイトもある。発展途上の議論であるため、可能性は未知数。

リチャード・ドーキンス著、日高敏隆訳『利己的な遺伝子』紀ノ國屋書店、1992

利他行為が結果的に利己的な動機によって行われているという議論。生物進化論の基礎文献の一つ。ちよつとミームとか言ったせいで有名になったが、ほかは動物たちのむつまじい観察記録である。

ダニエル・C・デネット著、山口泰司ら訳『ダーウィンの危険な思想』青土社、2001

厚い面白い哲学の本。翻訳に斎藤孝が加わっている。議論は相当ラディカルだが、生物学の知識がないとよくわからないところもある。某名古屋大学の院生に言わせると、「まだまだだね」て訳らしいが、読みやすい。ミームを人間の構成要件とまでいっている。

ロバートアンジェら編、佐倉統ら訳『ダーウィン文化論 科学としてのミーム』産業図書、2004

最新論集。序文はデネット。ミームの可能性と不可能性を論じるが、文化的な応用はまだ無理そうな感じである。

佐倉統著、『遺伝子VSミーム』廣済堂、2001

実践編。ミームの定義があやしいせいですべての議論が怪しいけど、なんか平和とかについて考えたくなる俺がいるのはたしか。

スパロボについて。

先行研究は存在しない。個別作品についてはいくらでもあるが。

ウェブサイト「オリメカ進化論」

オリジナルロボの進化の系譜が延々と書いてある。すげえ。

ウェブサイト「スパロボ・ウィキ」

ウィキペディアのサイト。今は無いかもしれない。ほしければテキストでもってるからあげてもいい。